

分科会の記録 <第 1 A 分科会 教育課程に関する課題>

【提言者 1】神奈川県 横須賀市立馬堀小学校 塩野谷 純香
【提言主題】豊かな人間性と創造性を育む学校を目指して ―「教頭力」向上のために―
【協議の柱】「主体的・対話的で深い学び」の授業実現等に向けた、副校長・教頭の在り方
【グループ協議 報告】 ・横須賀市の教頭会で指導のための冊子を作られていることが素晴らしいと考える。これにより、各学校において共通理解、共通実践が可能となっている。 ・授業観察カードは参考になった。このカードが教頭だけのものではなく、授業者や参観者においても同じもので参観できるため、授業評価視点の共有化が図られるだけでなく、授業づくりの参考ともなっている。このことが、現在課題の一つにも挙げられる若手育成に繋がっている。 ・冊子や観察カードを活用していくことで、どの学校においても共通した授業づくりが期待される。このことは、市内のどの学校に異動したとしても、共通した授業づくりで仕事ができるため、職員においても働きやすくなるのではないかな。 ・現在、若手教員の育成はもちろんであるが講師の育成も大きな課題となっている。冊子や観察カードの活用が大切であると感じた。 ・市の教頭会において、退職された管理職を指導者として活用されていることが素晴らしいと考える。 ・タブレット P C の導入により、それを活かした授業づくりが求められている。授業観察カードに ICT 利活用の視点を入れてはどうか。 ・自治体によっては、若手教員育成のための研修会を実施している。運営の仕方はそれぞれであるが、若手教員以外の教員も対象としたところ参加率が向上した自治体もある。また、若手教員の自主性を重視し、運営自体を若手教員に任せ、希望する講師の紹介などのサポートを行っている自治体もあった。 ・個人の力量任せではなく組織で積み上げていくことの大切さを改めて感じた。小中連携を視野に入れて取り組むことも大切と考える。 ・若手教員の育成においては、ミドルリーダーの活用が重要と考える。中堅教諭や各主任と連携を図りながら進めていく必要がある。また、若手教員とコミュニケーションを図りながら、本人のもっている力の良さを自覚させ、力量の向上に努めている。 ・若手育成のためにもミドルリーダーの育成が欠かせない。
【指導助言：全公教顧問会】（和歌山県田辺市立鮎川小学校長 中家 章一 氏） ・人材育成に対して、教頭の力は重要である。プロ意識を持って取り組んでいることに対して感謝する。 ・継続性、協働性、汎用性で考える。 ①継続性で考えると、3冊にわたる冊子づくりは、20年度、24年度、そして新学習指導要領への対応と、継続して取り組んでいる。これは、学校が変わっても共通実践の継続を可能にするものである。今後も継続して取り組んでいただきたい。 ②協働性については、この冊子づくりにおいても市内の教頭会で協働的に作業されている。この冊子が1つの基準となる。 ③汎用性については、授業観察カードが経験の浅い教員にとっても指導案作成や授業の振り返りに効果がありどの学校においても活用されている。各学校の取組が各学校の実態に即した形式となり市全体としての取組となり、どこに異動したとしても同じ視点で指導が進められる。 ・教頭には、リサーチが必要である。学校を知ることが大切である。そのために ①授業を見ること・・・教師、児童生徒の様子を把握することができる。 ②担任以外の教職員からの情報も大切にすることで多面的・多角的に把握する。 ・気持ちの良い職場作りに努める。役割分担をし任せることが大切である。（長い目で見ていく） ・常に話は傾聴し、話しやすい環境、言葉をかけやすい環境作りを心がける。
【指導助言：佐賀県】（佐賀県学校教育課参事 長尾 真司 氏） ・教頭会のキャラクターに、教頭の気持ち、思いが表れている。横須賀市教頭会の取り組みは多忙な役職の中で横須賀市が考える教頭力を示されており頭が下がる思いである。 ・教頭は、幅広い年齢層の教職員に対して指導助言を行う必要がある。教職員のモチベーションを引き上げていくためにどう伝えるかは大切である。基本的に長所を褒め課題に対してアドバイスを行っているだろう。しかし、褒めたくても難しい職員が存在する場合もある。常日頃からのコミュニケーションが重要と考える。 ・教頭には「人間関係形成力」が重要である。日頃からのコミュニケーションを図りながら関係性づくりに努めていくことも重要である。 ・退職管理職を招いての研修は参考になる取組であった。悩みを抱える中に解決への一助になる。日常的なものになれば更に良いと考える。 ・働き方改革の中で、いかに業務を軽減するかは悩むところである。教育委員会との連携も必要になる。 ・業務改善のポイントが増せば増すほど仕事は増していくものである。課題を焦点化していくことが重要である。 ・好事例を集約する、既存のものの活用も役立つ。